

[担当教員]

中江哲（客員教授 / 武庫川女子大学）小幡剛也（客員教授 / 竹中工務店）本田孝子（日建設計）楳橋修（准教授）浅井保（助教）

[Teaching Assistant]

木崎理沙 (A70) 松岡絢加 (A70) 山莊日捺子 (A70)

■課題概要

敷地は阪急六甲駅北側プラットフォーム沿いの区画。ここに建築教育施設、建築に関連する諸々の情報の発信拠点、そして駅機能の複合施設を計画する。阪急六甲駅の平日の乗降客数は約30,000人/日。一方、教育施設の主たる利用対象者は神戸大学建築学科 / 建築学専攻の関係者は約500人。さらに情報の受信者は不特定多数、無数の市井の人々である。ここを通過・滞留・滞在・参加（遠隔含）そして交錯する人々の間の創造的コミュニケーションを促し、これらの多様なアクティビティを可視化する場所とする。このようなイメージを顕在化させる、唯一無二の、ここにしかない磁場を創造することが本課題の趣旨である。

■附帯条件

駅機能は敷地内のいざれかに再構成する。既存バス・タクシー乗降機能は敷地外の隣接地に移設するものとし、計画敷地内には不要。教育施設は建築学科に所属する学部生・大学院生・社会人・研究者・教員を主たる利用者とする。情報受信者は建築・関連諸分野のインフォメーションや展覧会・セミナー（ウェビナー）などに集う人々である。それぞれの機能が輻輳する形態とする。建蔽率・階数は規定しないが、複数階積層が前提（面積要件を参照）。周辺環境に配慮したものとし、ランドスケープデザインも建築と同様の地平で思考すること。建築延面積は8,000m²程度とする（敷地（線路敷除く）は約9,600m²）。

■計画要件

1. 駅施設（計1,000m²）

改札口、駅長室、架線上施設、階段等、ショップ、WC他

2. 教育施設

スタジオ 400 m² ×2、デジタルファクトリー 200 m²、講義室 80 m² ×4、150 m² ×2、300 m² ×1、研究室 25 m² ×30、会議室 30 m² ×3、50 m² ×2、100 m² ×1、資料室 250 m²、レストルーム、シャワー、ランドリー他

3. 情報発信施設

ホール 600人収容・ステージ、ホワイエ、レセプション、ライブラリー、ワークショッフルーム、建築模型展示室、デジタルアーカイブ他
+コミュニケーション施設（自由設定）

カフェテリア、レストラン、ショップ、アート、フォリー、各機能を連鎖するオープンエア空間等



引き寄せる居場所

金谷百音

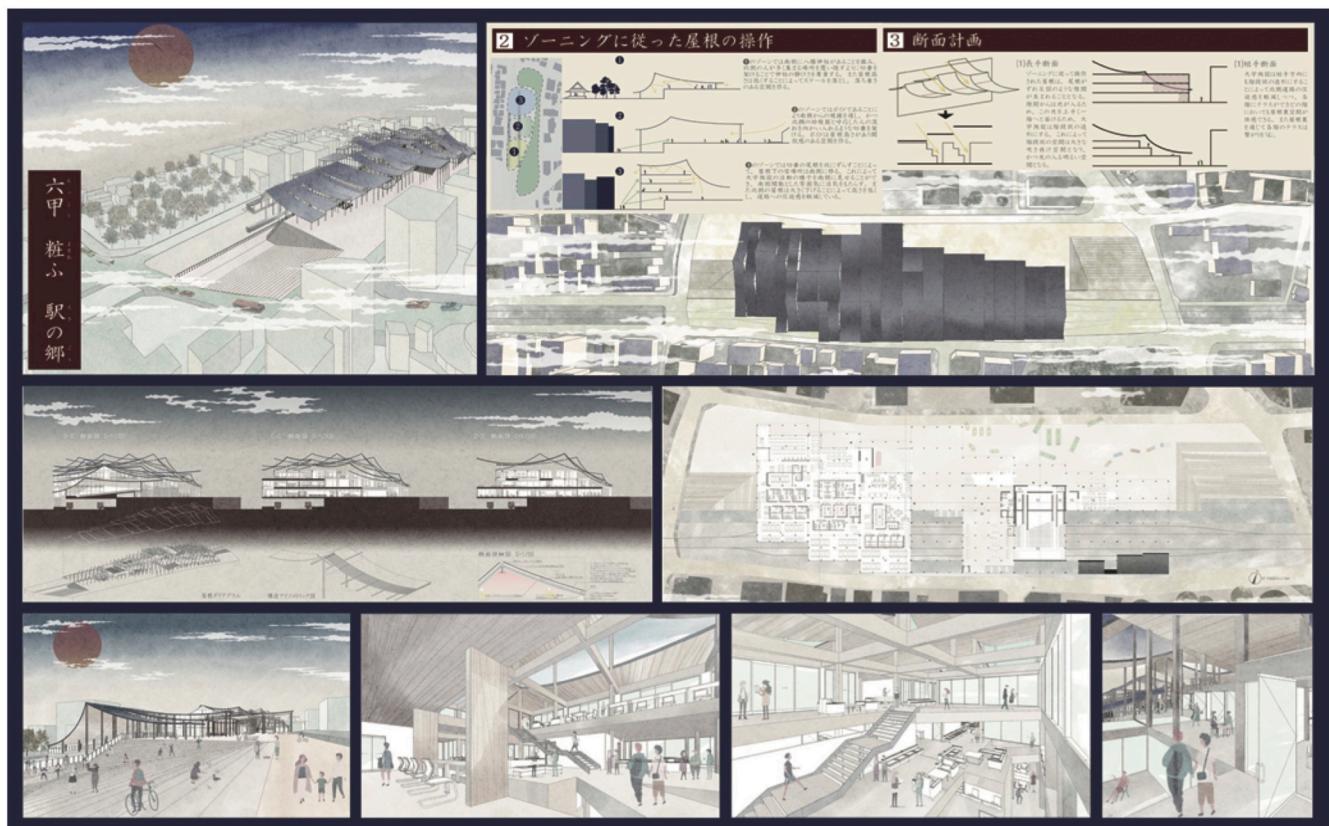
1枚の紙を4回折った形を一単位として、その単位の中に駅機能や一般機能を置き、人の導線がそれらの機能を巻き込んでいく。利用者の活動のそばにはいつも阪急電車があり、阪急電車に愛着が持てるような、駅機能と一般機能の境界線が極めて薄くなった駅を提案する。



「六甲 粧ふ 駅の郷」(ろっこう よそおふ えきのごう)

千馬生吹

六甲に懸垂曲線の切妻屋根を持つ駅+大学施設を設計する。屋根の形態は八幡神社を思わせる形態から徐々にズレが生まれやがて六甲山のような形態に変わる。神社を装った駅は人々の居場所となり、六甲山を装う大学施設は屋根のずれから入る光がその活動を明るく照らす。



*バースの添景：https://jp.freepik.com/premium-vector/seamless-pattern-with-people-walking-on-street-riding-bike-or-skateboard-backdrop-with-men-women-and-children-performing-outdoor-activities-flat-cartoon-illustration-for-textile-print_8979033.htm#query=%E4%BA%A8&position=8&from_view=search&track=sph

“縫う” — sewing University & Rokko —

丁子紘亘

六甲は学生の街であるにもかかわらず、街に対して大学が参加している場面はあまりに少ない。そこで、駅機能と大学の活動を“縫い合わせる”。大学と地域（六甲駅）を“縫いあわせる”ことで、大学の様々な活動が街に開かれ、街や駅との新たな関わり方を生む。



Consecutive gates

山口沙礼

雑然とした六甲の街並みの中に、余白、方向性、リズムをもつ建築を建て、人々を引き付け、押し出す街の玄関としての駅 × 大学機関を創出する。連続した門型フレームを潜り抜け、電車や人が行き来し、フレームで切り取られる空や山々は人々に安らぎを与える。



*バースの添景 on Skalgubbar (www.skalgubbar.se) のものを使用

See-Through

長谷川晶穂

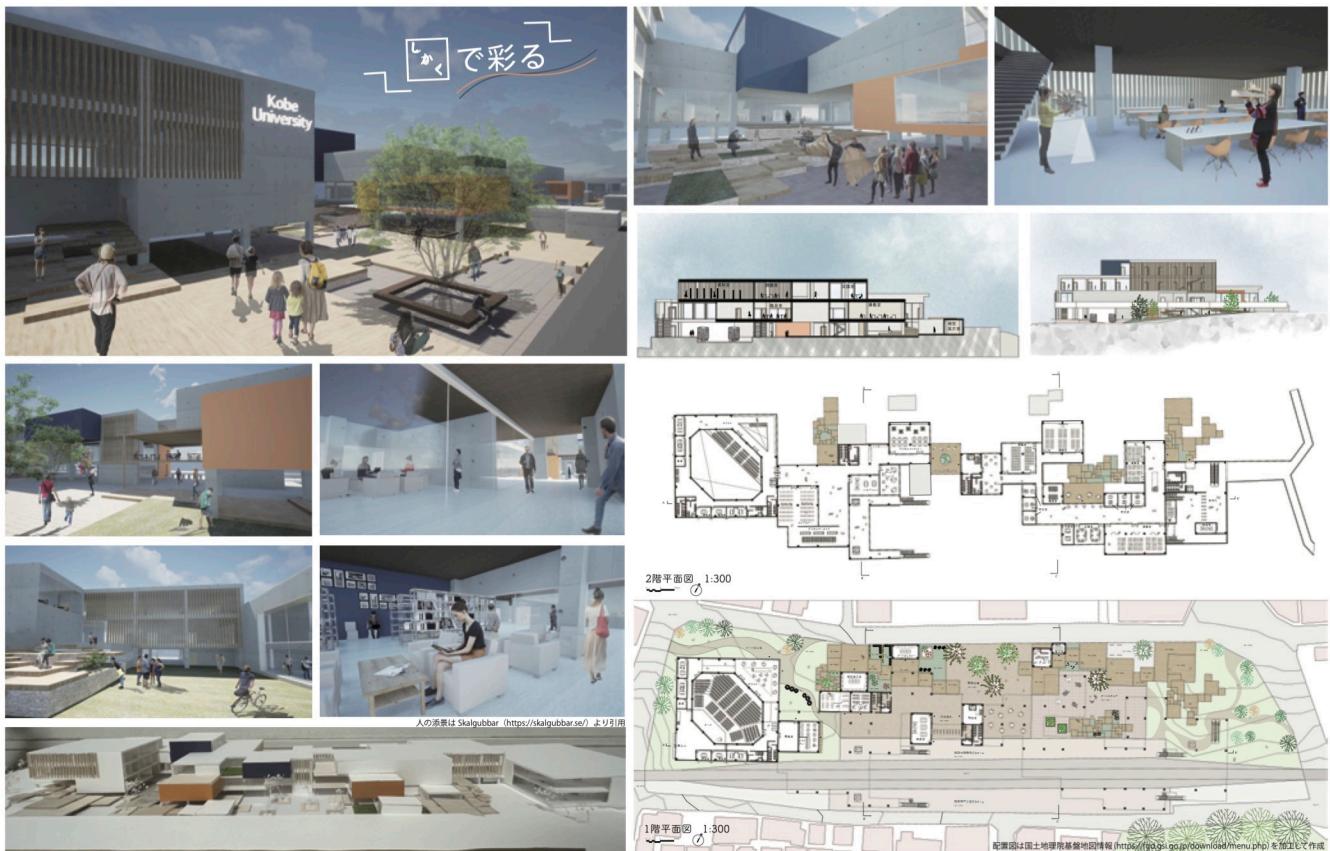
六甲に溶け込む建築。外と内の間の空間や様々な滞留空間により、建物が、人が、活動が、雰囲気が緩くつながる。六甲のまちや人に溶け込んだような、居心地のよい溜まり場や寄り道の場、学びの場となることを目指す。



しかくで彩る

柳内あみ

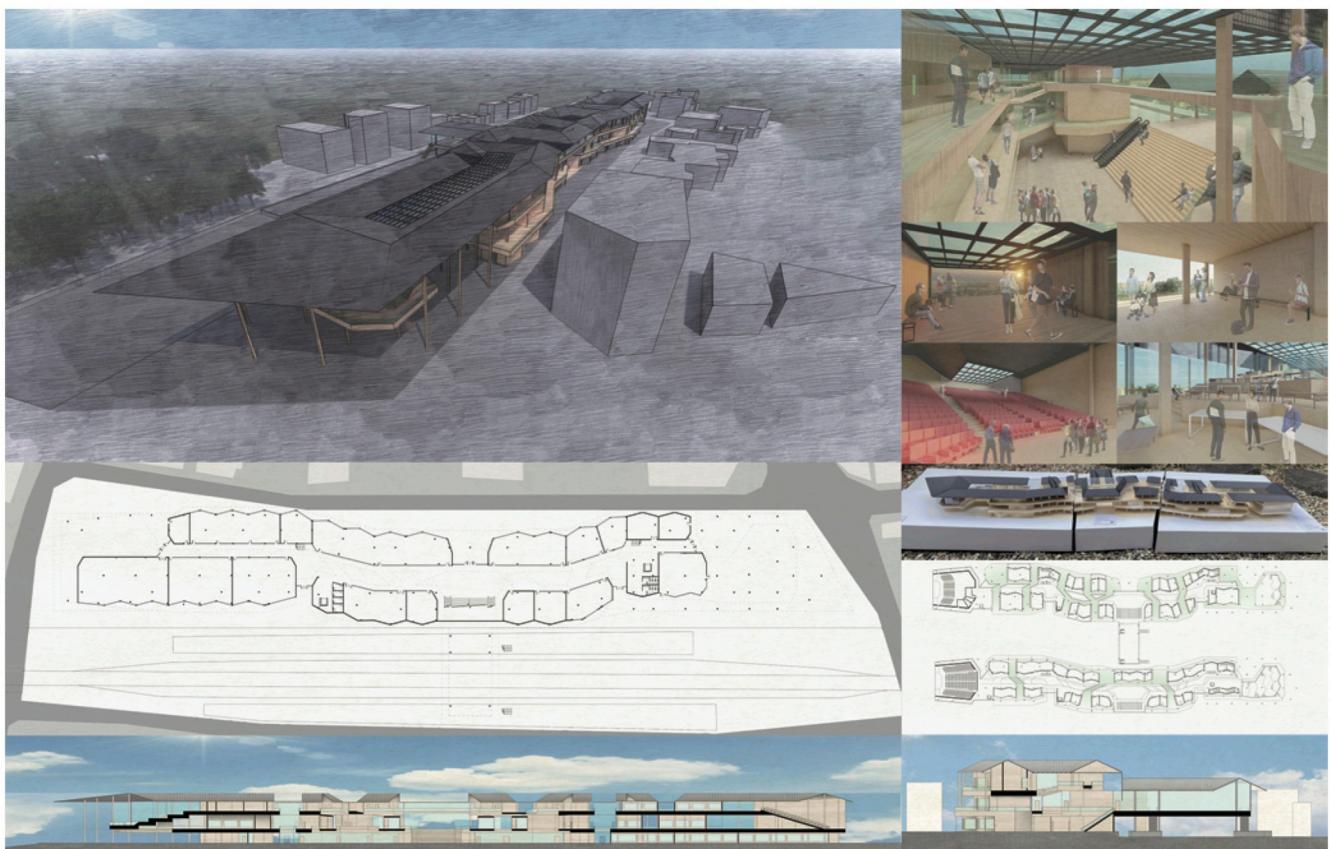
3.75m グリッドに沿ってキューブをずらしながら連続させることで小さな隙間を生み、現在分断されている南北のエリアに繋がりをつくった。北側をサンクンガーデンとし、そこに建築やアートに触れられる小さな居場所を散りばめ、地域の交流拠点となることを目指した。



風脈の調べ

泉貴広

長手方向に展開するガレリアに対して垂直に挿入される風脈はその内部に外部空間を有している。進行方向に対して横切るように現れる風脈の数だけ余暇の空間と動線経路が生まれ、建築全体に余地をうむ。利用者に最短経路ではない最適経路を提供する建築である。



*ベースの添景に Skalgubbar (www.skalgubbar.se) のものを使用